

明治・大正・昭和前期の学童の衣生活とその背景(第2報)
 文教大教育 松田歌子 ○伊地知美知子 高島 豊

目的 明治初期から昭和前期までの学童の衣生活の変遷とその背景について、既に5報まで報告を行った。今回は対象を広島県因島市とし、前橋市、須和市と比較・対照しながら特徴、差異などを考察した。今まで発表した地域と歴史的・地理的に著しく異なると思われるのぶこの地を定めた。

方法 因島市内の100年以上の歴史を持つ小学校を対象に、百年史、卒業写真、古老よりの聞き取り等をもとに衣生活の変遷及びその周辺を調査した。

結果

- 明治後期の女子は黒綿子の半衿をつけ2いた。
- 洋服への移行は、洋服着用者が現れ始めてから全員洋服になるまでに9~10年と短期間で行われた。前橋市に比べ4年も速い。
- はほぼ全員洋服になったのは昭和10年頃である。
- 洋服の種類としては、女子の場合、前橋市ではワンピース、セーター等色々な種類が見られたが、本市ではセーラー服が主であった。